

【おとと】

穏やかな夕刻、お使いの帰りに、いつも通り躑躅峠（つつじとうげ）にさしかかると、峠のむこうから、大きな男が来るのが見えました。

急に風が強くなって、大きな男はその風に逆らってやってきます。

なんだかはっきりしない姿ですが、大きな男であることにまちがいはなさそうです。

あれほど大きな男は、村びとにはいない。

それなら町の間人かというところ、峠のむこうには、町どころか、何も無い。

広い荒地と、いくつかの無縁仏（むえんぼとけ）の墓があるばかりです。

ぼくは寒かったわけでもないのに、怖かったわけでもないのに、突然身体がふるえ出しました。

そうして、

（もしかして、もしかして、もしかして）

と何度も何度も、こころのなかで呟きました。

それだけでは我慢できずに、とうとう声に出してしまったのです。

「おととさま、おととさま」

大きな男は何も答えずに、こちらに向かってきます。

どこからか、太鼓の音、笛の音。

盆踊りが近いので、村の大人たちが、太鼓や笛の稽古（けいこ）をしているのです。

ずっと遠いはずなのですが、風が強いので聞こえるのです。

「おととさま、おぼんじゃのう」

ぼくは声をかけます。

「うむ」

と返事をしたのか、しないのか。

ぼくはむろん、返事をしてくれたとおもって、嬉し泣きをします。

「おととさま、きげんはよろしいかのう」

ぼくはまた声をかけます。

「うむ」

こんどはまちがいない。

返事をしたのです。

太鼓の音、笛の音。

ぼくはそれに合わせて、踊りはじめます。

「おととさま、おととさま」

と呼びかけながら。

「うむ、うむ」

大きな男は、返事をした直後に、消えていました。

(そうなるか、そうなるか、そうなるか)
ぼくはこころのなかで、繰り返しました。
涙が溢れて、いつまでも止まりませんでした。